

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	里見 聡
論文題目	心理臨床における関係性の視点		
(論文内容の要旨)			
<p>心理臨床面接において、我々は通常のものとは異なった二重の人間関係を経験する。一つは特定の知識を持つ専門家とその専門家に援助を求める依頼者との間に成立する関係であり、もう一つは二人の人間としての無意識的・情緒的な関係である。心理臨床に関わる者はこれらの二重の関係性を生きなければならない。本論文は、心理臨床面接におけるこのような二者の関係性について考察を行ったものである。</p> <p>第一章では、精神分析を中心に、間主観性理論に関する文献をレビューし、クライエントの精神内界を客観的に取り上げることを目指した古典的精神分析から、心理臨床家とクライエントとの主観性の交わる場として面接を捉える関係性理論への変遷について展望した。そして、心理臨床家とクライエントとの交流の場こそが治療の主体として機能するという、コンテクストを主眼に置いたモデルを取り上げ、このモデルを読み解く鍵として、Winnicott の移行対象の概念を考慮に入れながら、心理臨床面接における間主観性について考察を深めている。</p> <p>第二章においては、Winnicott が臨床場面で用いたスクィグル・ゲームを用いて心理臨床面接における間主観性について調査研究を行った。その結果、面接に関わる二者の関係性がなぐり描きや描画によっていかに変化し、そして同時に、なぐり描きや描画が二者の関係性に影響を与えるのかについて、検討可能な視点や指標の一端を提示することができた。特に、面接者がなぐり描き線や描画の内容を主導的に変換させた場合、調査協力者が面接者との間に距離感を感じやすいことや、調査協力者がなぐり描き線の変化を主導的に変化させていくことで、調査協力者が安心して自己表現ができるという結果が得られたことについては、スクィグル・ゲームを臨床場面で用いる際に、新たな示唆を与えるものであると考えられる。</p> <p>臨床場面において関係性の視点が重要になるのは心理療法に限らない。非行臨床においても同様であり、非行少年とそれに関わる支援者との関係性の視点を抜きに非行からの立ち直りを語ることはできない。第三章では文献研究を行い、非行からの立ち直りに関する理論を概観することで、非行少年の側に原因を帰属し、非行に影響を及ぼす要因を除去することが重要であると考えられていた非行臨床の理論が、近年、非行少年と援助者との出会いの構造から理解しようとする方向に変化してきていることを示し、非行臨床に関係性の視点を導入することの重要性について指摘した。</p> <p>第四章では、非行臨床の現場において従来明らかにされてこなかった、心理臨床家とクライエントの個人的要因、面接の中での交流から生まれる互いの感情体験、面接で話し合われる内容及びアセスメント・レポートがそれぞれどのように影響しあっているのかを、少年鑑別所における資質鑑別面接を分析することによって検討し、一つのモデルを提示した。矯正領域におけるアセスメントが単に少年や非行事実を客観視し、事実関係を明らかにするということだけではなく、心理臨床家が非行少年との関係性に影響を受けつつも、適切な距離を測りながらアセスメントを進めているということが明らかになった。</p> <p>スクィグル・ゲームを用いた心理療法であっても、矯正領域におけるアセスメント</p>			

面接であっても，心理臨床家とクライアントの関係性は二者の個別の内的プロセスと分かつことのできない移行対象としての意味合いを持つ。心理臨床家はクライアントの移行対象を適切な形で扱いつつ，自らの移行対象を提示し，適度な遊びをもって治療的に利用できるような状態を保たなければならない。

(論文審査の結果の要旨)

心理臨床面接においては、通常の人間関係とは異なった「関係」が展開される。本論文は、心理臨床面接における二者の関係性、特に二人の人間としての、無意識的・情緒的な「関係」についてとりあげ、考察を行ったものである。

第一章では、こうした「関係性」について考察するために、まず、間主観性理論に関する文献をレビューしている。それによって、クライアントの精神内界を客観的に取り上げることを目指した古典的精神分析から、心理臨床家とクライアントとの主観性の交わる場として面接を捉える関係性理論への変遷について展望された。なかでも、Winnicottの移行対象の概念を考慮に入れながら、心理臨床面接における間主観性について考察を深めている。

第二章においては、Winnicottが臨床場面で用いたスキュグル・ゲームを用いて調査研究を行っている。その結果、面接に関わる二者の関係性を、可視的に捉えることを示せた。特に、スキュグル・ゲームを「関係」の観点から捉え、調査協力者がなぐり描き線の変化を主導的に変化させていくことで、調査協力者が安心して自己表現ができるという結果が得られたことについては、スキュグル・ゲームを臨床場面で用いる際に、新たな示唆を与えるものであると評価しうる。

本論文が独自性をもつのは、その後の第三章、第四章において、非行臨床における「関係性」に注目していることである。著者は、少年鑑別所に長年勤務しており、その経験を生かしている。非行少年とそれに関わる支援者との関係性の視点を抜きに非行からの立ち直りを語ることはできないのだが、従前は、非行少年の側に原因を帰属し、非行に影響を及ぼす要因を除去することが重要であると考えられていた。しかし、本論文では、近年、非行少年と援助者との出会いの構造から非行臨床を理解しようとする方向に変化してきていることを示し、非行臨床に「関係性」の視点を導入することの重要性について指摘した点に本論文の意義が認められる。

また、本論文では、矯正領域におけるアセスメントが単に少年や非行事実を客観視し、事実関係を明らかにするというだけではなく、心理臨床家が非行少年との関係性に影響を受けつつも、適切な距離を測りながらアセスメントを進めているということも、明らかにしている。

本論文はそもそも、著者のイニシャルケース（事例）での体験をもとに出発している論文である。心理臨床においては、セラピストは「無傷」ではいられない。本論文は、そうした「傷」から出発しながらも、それと距離を保ちつつ、かつその体験を自らと関係付けようとする点で、きわめて臨床的な論文であるといえよう。

しかし、「関係」という大きなテーマを扱っているがゆえに、本論文ではとらえきれなかった点があることも否定できない。

試問では、これまでの理論が丁寧にレビューされてはいるが、そのうえで著者の考えがどのように論じられるのか、もう一步踏み込んだ議論がほしかったという意見が出た。しかし、これらの指摘は、本論文の今後の可能性への課題と期待であって、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年2月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：\_\_\_\_\_年\_\_\_\_月\_\_\_\_日以降